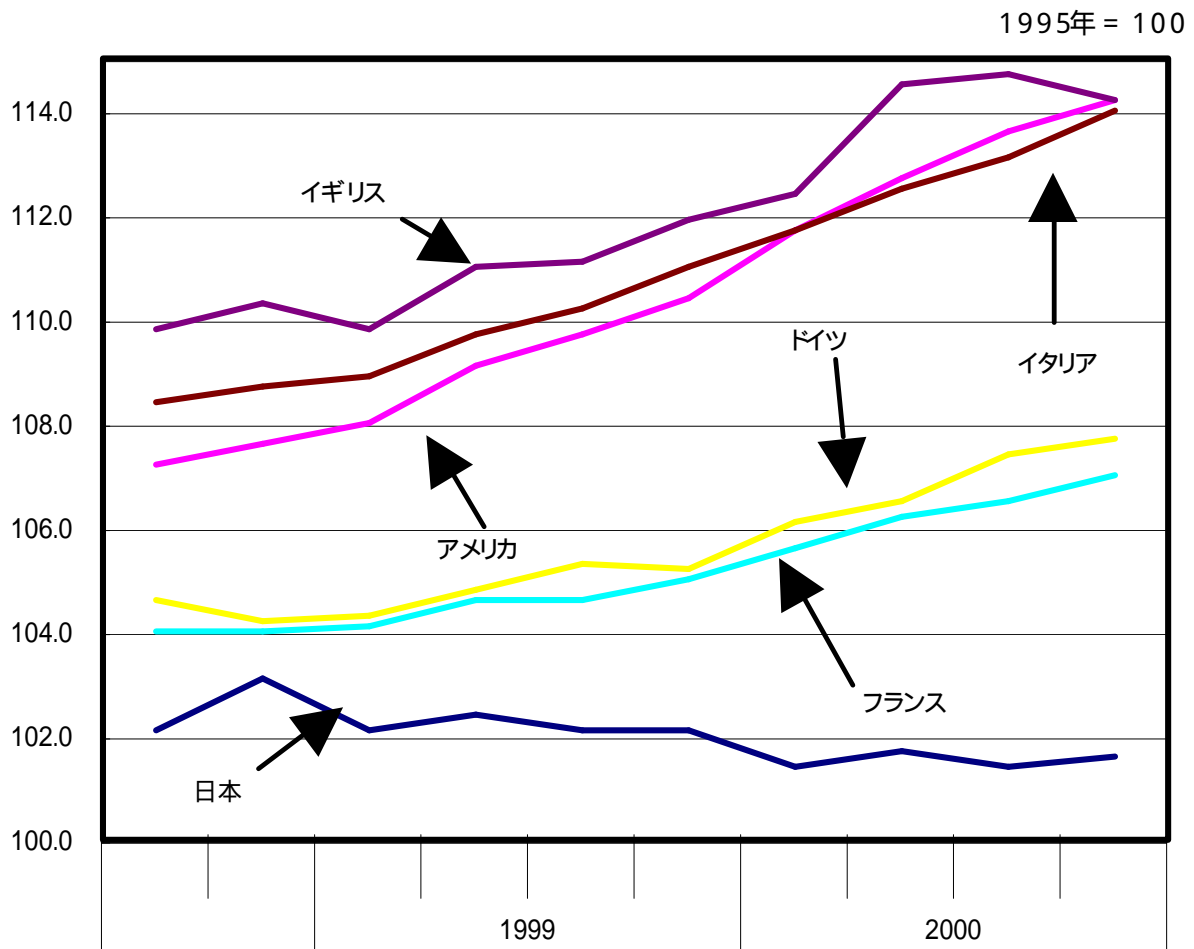


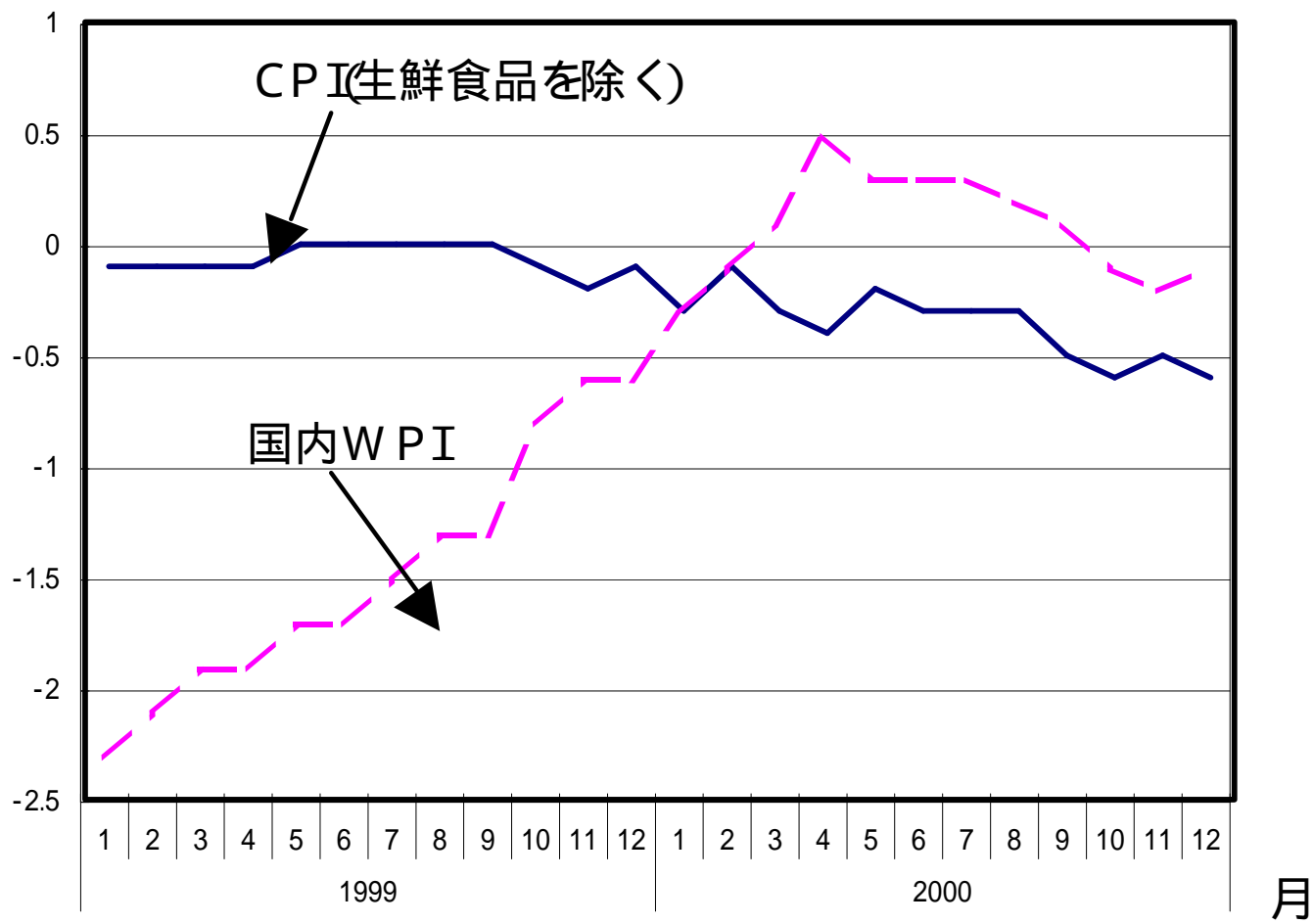
図表1 主要先進国の消費者物価指数の推移



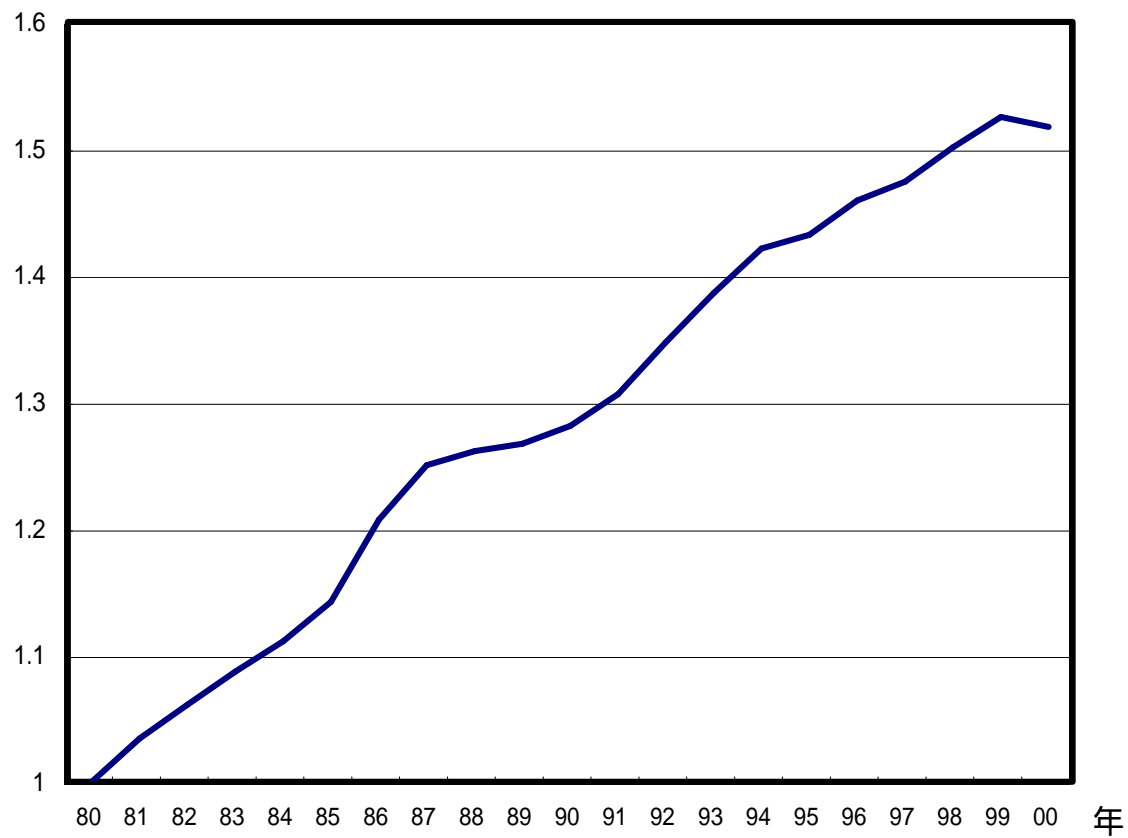
図表2 消費者物価・国内卸売物価の推移

(%)

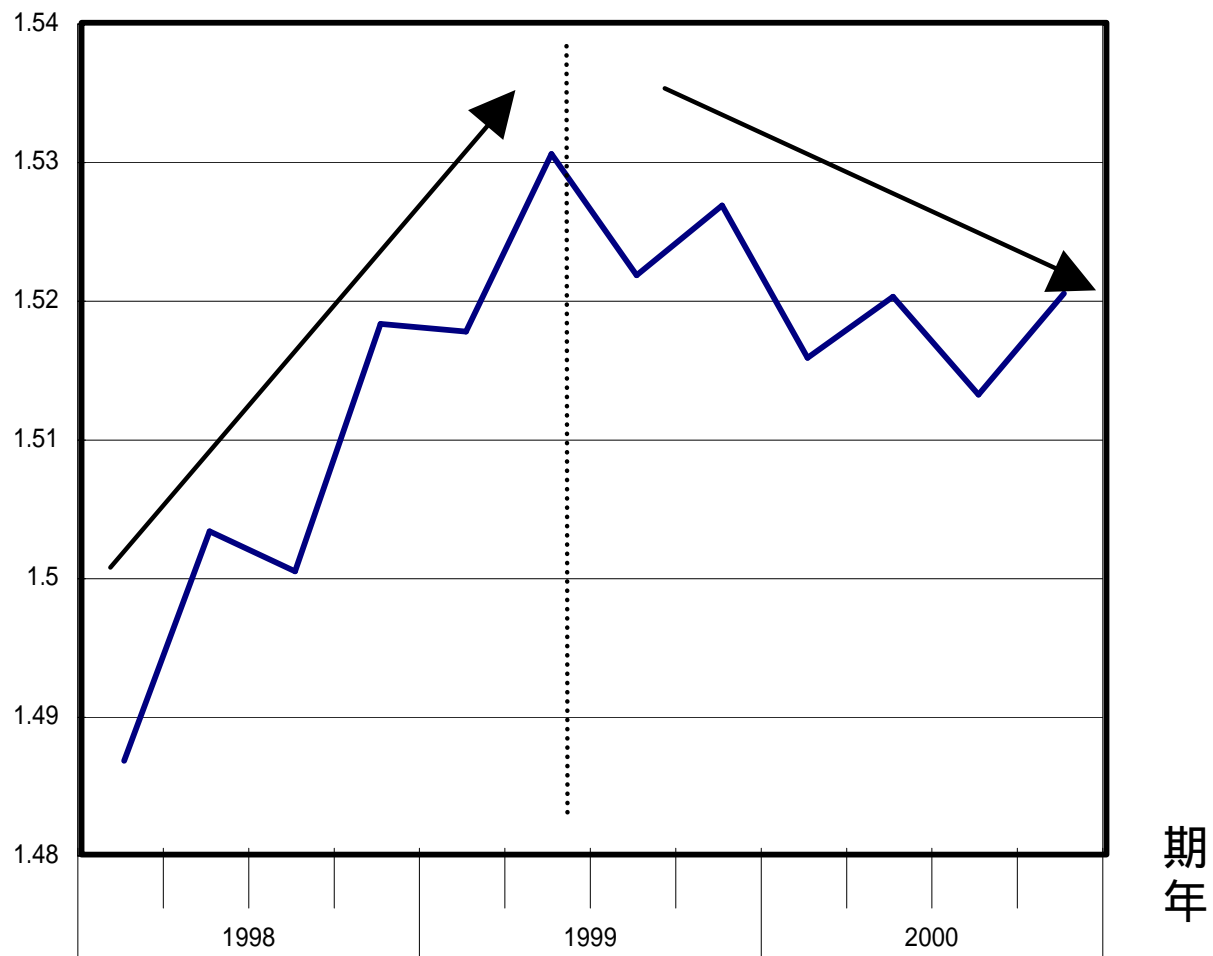
(前年同期比)



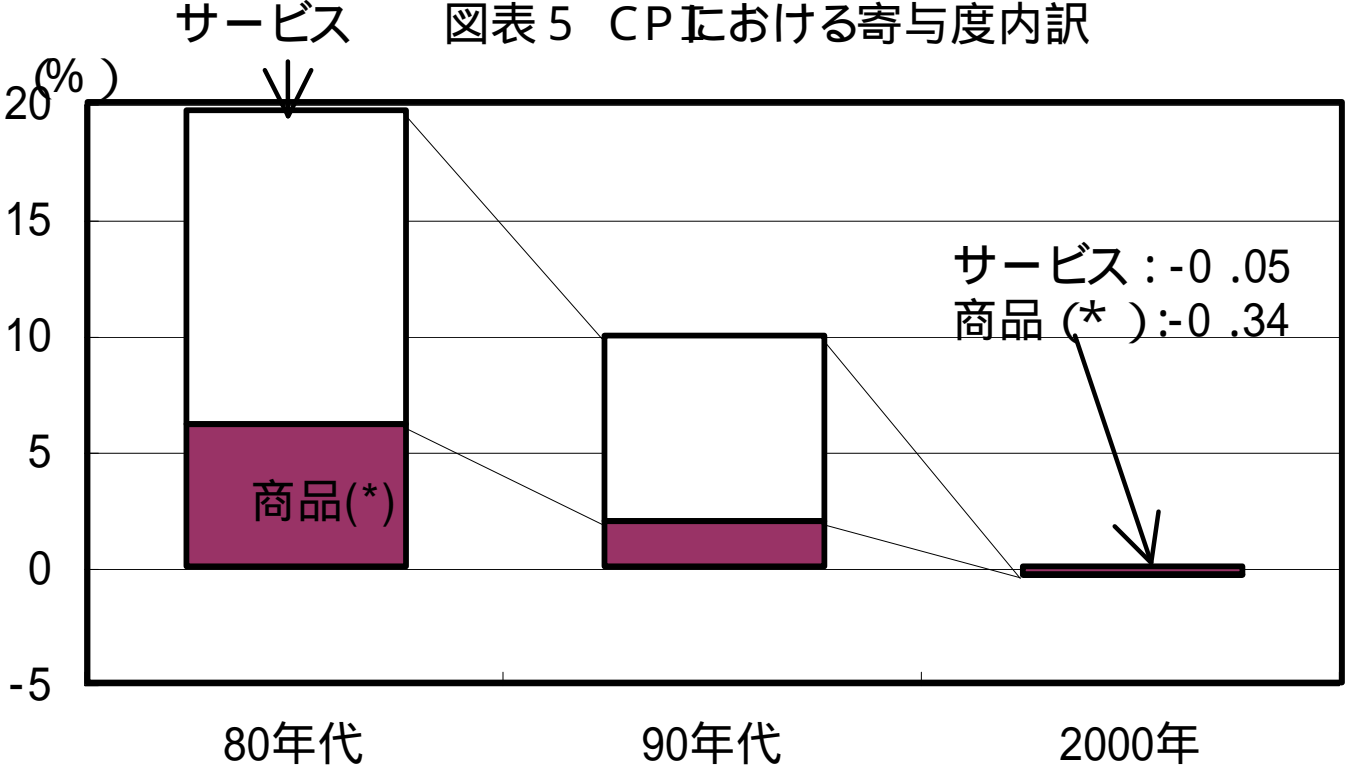
图表3 CPIWP比率



图表4 CPIWP比率



図表5 CPにおける寄与度内訳



図表6 90年代後半に、世界の1/4がデフレを経験

地域別	主な国	下落幅
先進工業国 (6カ国 含む日本)	オーストラリア	0.7% (3四半期)
	カナダ	0.6% (1年間)
	ニュージーランド	1.1% (3四半期)
	ノルウェー	0.4% (1年間)
	スウェーデン	1.4% (16カ月)
アフリカ (14カ国)	コンゴ	30.4% (9カ月)
	オマーン	15.2% (3年間)
アジア (6カ国)	シンガポール	1.7% (1年間)
	タイ	1.6% (11カ月)
	香港	4.3% (14カ月)
中・東欧 (4カ国)	アルメニア	12.7% (7カ月)
	ブルガリア	5.1% (14カ月)
中 東 (7カ国)	クウェート	14.1% (3年間)
	サウジアラビア	13.4% (2年間)
中南米他 (4カ国)	ブラジル	1.0% (6カ月)
	アルゼンチン	1.7% (11カ月)
計 41 カ国・地域 / 182 カ国・地域		

出所) IMF, Safeguarding Macroeconomic Stability at Low Inflation, “ IMF WORLD ECONOMIC OUTLOOK Oct. 1999 ”

図表7 年代別にみた物価上昇率がマイナスを記録した頻度

(%)

月次データ	60年代	70年代	80年代	90年代	97年以降
C P I					
世界計	12.2	3.2	5.7	5.5	7.1
工業国	1.5	0.0	2.0	1.9	3.8
非工業国	16.8	4.1	6.6	6.2	7.7
P P I / W P I					
世界計	15.3	4.7	10.0	16.6	25.0
工業国	12.1	4.3	15.1	29.2	41.8
非工業国	17.7	5.0	6.5	9.8	17.3

注) 前年同月比で、物価上昇率がマイナスになった割合

出所) IMF, Safeguarding Macroeconomic Stability at Low Inflation, “ IMF WORLD ECONOMIC OUTLOOK Oct. 1999 ”

図表 8

最近のCPI、WPI、GDPデフレーター、GDP及びIPの動向

		CPI		WPI	GDP デフレーター	GDP	IP
		総合	生鮮食品を 除く総合				
1998暦年		0.6	0.3	-1.5	-0.1	-1.1	-7.1
1999暦年		-0.3	0	-1.5	-1.4	0.2	0.8
2000暦年		-0.7	-0.4	0.1	-1.7	1.7	5.7
2000年	1-3期	-0.7	-0.2	-0.1	-1.7	2.4	0.8
	4-6期	-0.7	-0.3	0.3	-1.8	0.2	1.7
	7-9期	-0.7	-0.4	0.2	-1.4	-0.6	1.6
	10-12期	-0.5	-0.5	-0.1	-1.7	0.8	0.4
2000年	1月	-0.9	-0.3	-0.3			-0.1
	2月	-0.6	-0.1	-0.1			-0.5
	3月	-0.5	-0.3	0.1			2.4
	4月	-0.8	-0.4	0.5			-0.6
	5月	-0.7	-0.2	0.3			0.3
	6月	-0.7	-0.3	0.3			1.9
	7月	-0.5	-0.3	0.3			-0.9
	8月	-0.8	-0.3	0.2			3.4
	9月	-0.8	-0.5	0.1			-3.4
	10月	-0.9	-0.6	-0.1			1.5
	11月	-0.5	-0.5	-0.2			-0.8
	12月	-0.2	-0.6	-0.1			1.8
2001年	1月	0.1	-0.5	-0.3			-4.2
	2月	-0.5	-1.1				

(注) CPI及びWPI(ただし、本欄には国内卸売物価を記載)、GDPデフレーターについては、前年同期比増減率。
GDP及びIPについては、前期比増減率。 は、東京都区部中旬速報値

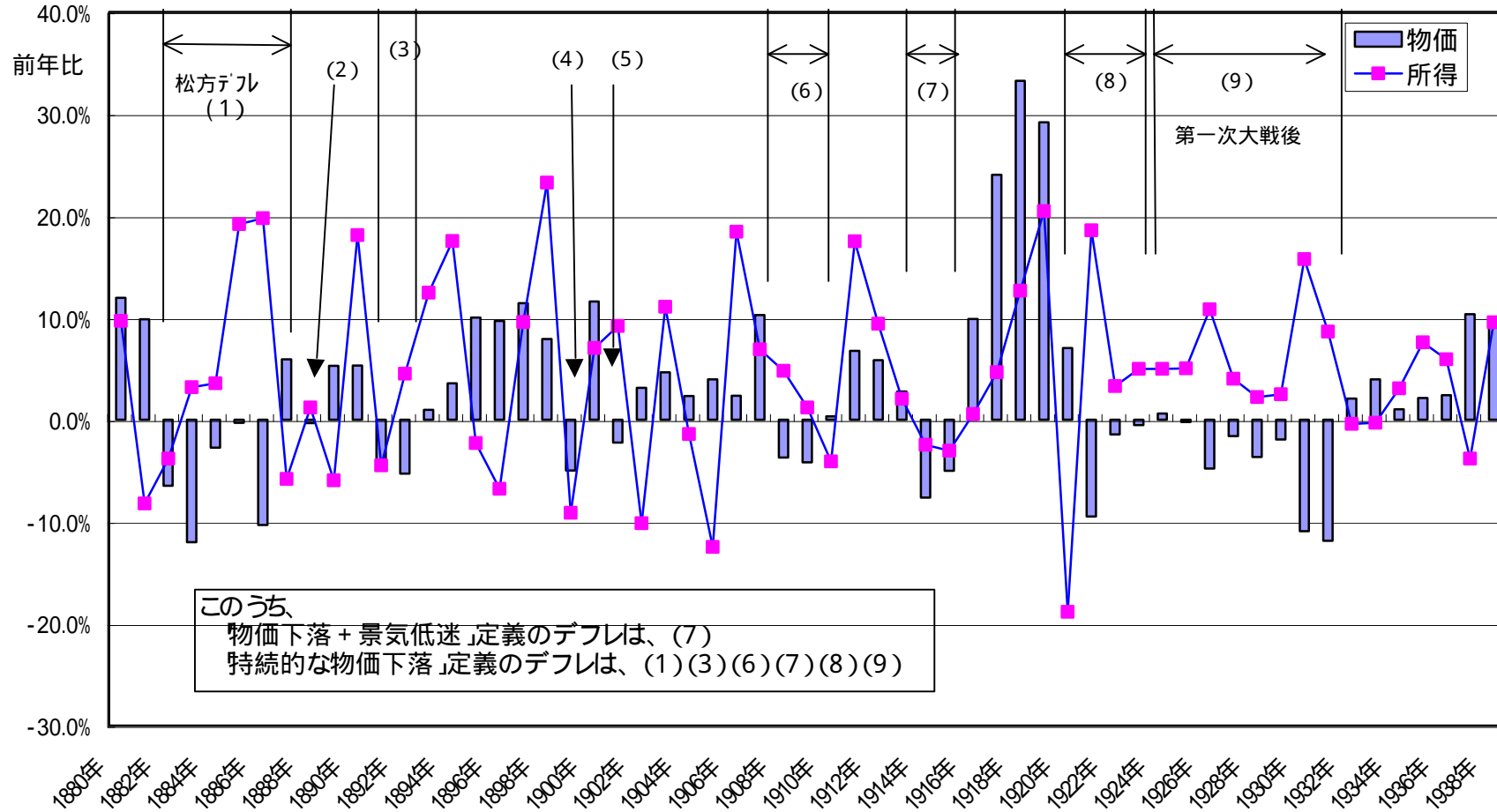
図表9 大臣の記者会見における主な発言(要約)

1999年		堺屋長官時代
4月28日	98年秋には、かなりデフレ・スパイラルに陥る危険があった。しかし、各種の対策によってそれは防げた。デフレ・スパイラルの危険からは脱した。	
5月28日	構造改革を続け、日本のロー・コスト社会を実現していく段階では、当然物価の下落、それに伴うそれと表裏の関係にある人件費の抑制が出てくるのは普通じゃないか。	
6月29日	消費者物価については、現実はずっと下がっているのではないかと批判もあるが、今のところの統計のあり方は以上の通り、今後、百貨店やスーパー、大型専門店、新しい業態についてもどう統計に反映していくべきか、今後の課題である。	
10月1日	景気は底打ちという言葉が適切かどうか分かりませんが、変化の胎動から十月十日、景気回復の息吹は確かに出てきたと思う	
11月26日	デフレ・スパイラルの回転はある輪で切れていると思う。しかし、物価の下落、それから所得、ボーナスの低さ、雇用はまだ要注意ですね。だから、デフレの要素、デフレではないが、デフレ的要素はまだ払拭していかないんじゃないか。	
2000年		
1月28日	消費者物価の値下がりにともない、いい値下がり悪い値下がりがあると思うが、雇用がやや改善、企業収益あるいは景況感にも明るさが増えているということからみると、この値下がりデフレ的要素になっているとは思っていない。低物価社会が定着している。	
2月25日	消費者物価としてかなり大きな下落です。デフレではありませんが、デフレ懸念がないかどうか。デフレ懸念が払拭されたら、ゼロ金利をやめるとい話がありました。なお懸念があり、ここから政策を誤れば、デフレに再び落ちる懸念があると思う	
7月28日	悪い値下がり、いい値下がりという関係では、サービスの値下がりの中に、不動産関係の値下がりというのがある。そうい循環がどうなっているのか。また、どこまでがいい値下がりの部分、どこが悪い値下がりの部分かちょっと判断つきかねる。	
8月25日	この10-12月あたりを展望すると、1-3月、4-6月の調子で伸びていくかどうか、非常に疑問を感じている。その一つとして、この消費者物価の動向というのは懸念指標だと思うが、急にこれが悪いと今断定するわけにはいかないが、要注意信号として分析する必要があると思う	
9月29日	今の経済はまさに入れ代わりの時期。総理は7回目、8回目と表現していたが、正に上昇するものと降りゆくもの間に非常に移り変わりの激しい時に来ている。正に勝負どころというのがわずかな数字の中に現れていると思う	
10月27日	この程度の物価値下がり基本的に日本経済を危うくするとは思っていないが、この秋になりまして、非常に落ち着いた動きというか、経済全体に夏より警戒すべきというか、引き締まった感じ、夏の楽観的な雰囲気とはちょっと違った感じが出てきていると思う	
12月1日	かねてからデフレ懸念といいますが、物価下落について懸念していたことが、この秋になってかなりはっきりしてきたんじゃないかという感じがしている。私どもは8月にゼロ金利解除が時期尚早ではないかと申し上げたのは、現在のような状況を想定してのことでした。	
		額賀大臣時代
12月26日	物価が下がり、さらに物価の下げが物価の下げを呼んで、悪い条件が重なっていくということがデフレ・スパイラルということであるならば、まだその時点には至っていないというふうに思っている。今のところ、生産コストの引き下げだとか流通段階の合理化とか、そういうことによる値下がり影響の方が大きいというふうに受け止めるべきではないかと思っている。	
2001年		麻生大臣時代
1月25日	(経済が今デフレであるという認識ですが) だっって物価が下がっているんだから、物価が下がっていることをデフレと言っんじゃないの。デフレ・スパイラルも十分に起こらうと思っすよ。	
1月26日	正直言って、少なくとも消費者物価が主要国において昨年マイナスとなった国というのは日本以外ない記憶しますので、日本だけが例外。日本だけが生産性が非常に上がっているから、日本だけが下がったとはなかなか言い難いのではないかと。担当大臣がデフレ・スパイラルですなんて言うことだけではないと思っすよ。	
1月30日	今は買う商品の物価も下がっているわけです。給料はそこそこ、役人の給料は5%年率で下がりましたが、買う側の方の所得は、平均的にみて、物価が下れば可処分所得が増えているわけですから、そのところの数字はどうだろうと思っすよ。購買力が下がっていると言われると下がっているということになるのでしょうか、買う商品の値段も下がっていますから、ですから、それから考えるとあの数字がそのまま下がっている数字として考えるのは、ちょっと数字を見ただけの数字として考えるのは、前提条件が少し違っではないものかと思っすよ。	
2月6日	この数年間ずっと物価というのは下がっていると思っすよ。先進国の中で消費者物価が上がってないのは日本以外ありますかね、全部下がっているというあいまいに理解しているんですけどもね。ちょっとまだ数字を正確につかんでいませんけれども、消費者物価指数が下がっている先進国というのは、僕はこの数年間はないと思っすよ、日本以外。だから、そういう意味では、にもかかわらず12%成長をしているということは、物価下落はもっとうっているということでしょう。0.5下がって、1.5下れば2%物価下落と同じことですから、そういう数字になるんだと思っすよ。そういう意味では、日本という国は随分と主婦の感覚からいったら物価はもっとう下がっていると思っすよ。奥さん方は多いと思っすよ。	

景気感からいけばよくないです。景気の感情、景気の気分からいったら。だって、先ならもっと安くなると思うわけですから、物は売れませんよ。先になったらもっと高くなるから今買うんであって、先になったら安くなると思うんだったら買わないでしょう。だから、そういうものだと思いますけれども、だから、消費者の心理は冷やしますね。

明治～戦前

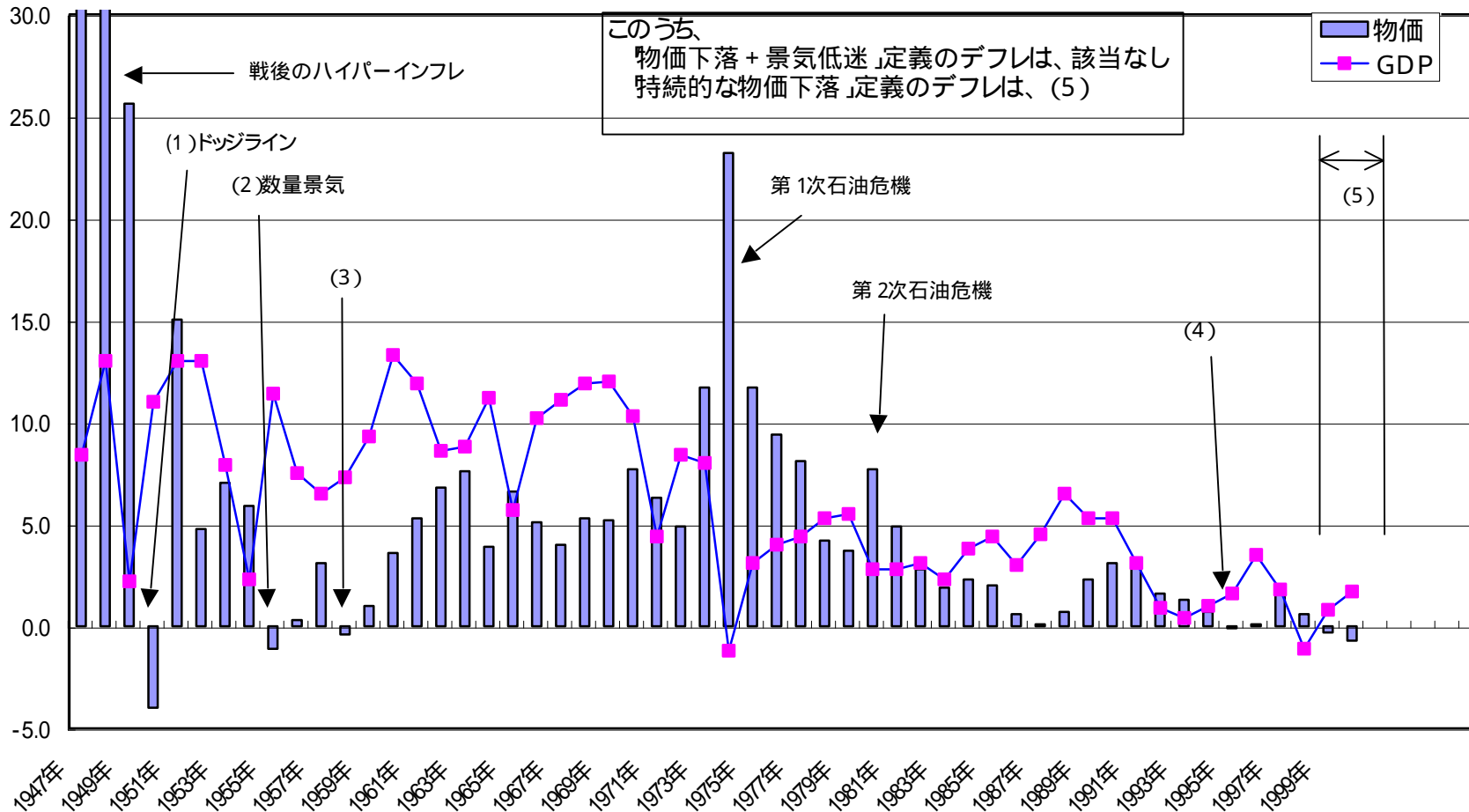
図表11 物価と実質国民所得の推移



注1) 物価指数は、総合支出指数を採用。所得は、実質生産国民所得(大川推計)を採用。
 注2) 物価下落 + 景気低迷」定義とは、「物価の下落を伴った景気の低迷を指す場合」。
 持続的な物価下落」定義とは、「2年連続で物価が下落する場合」。

前年比% 戦後

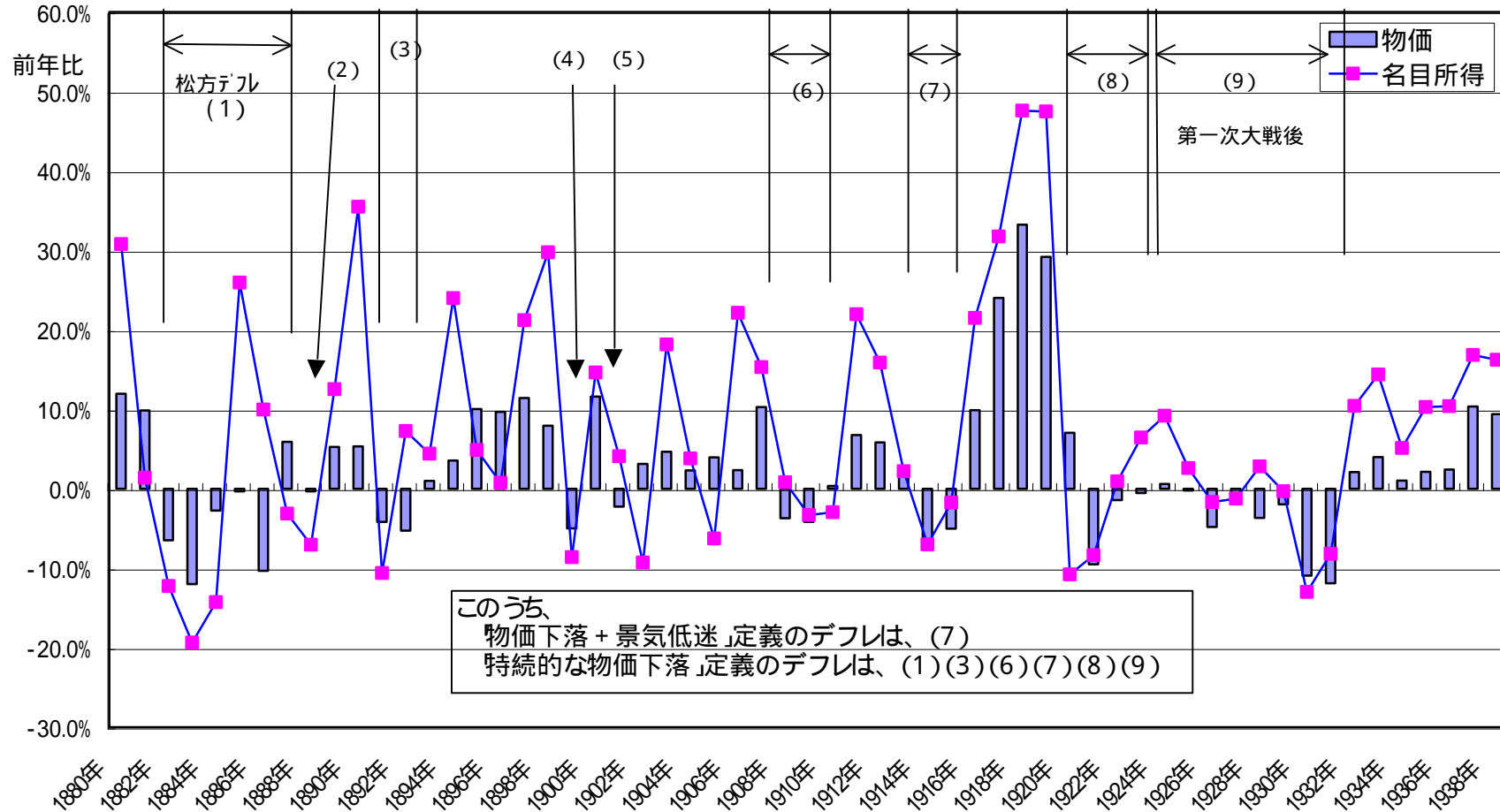
図表12 物価と実質GDPの推移



注1) 物価指数は、戦後消費者物価指数総合(都市・農村総合)消費者物価指数を採用。GDPは、実質GNP(～1955年)と実質GDP(1956年～)を採用。
注2) 物価下落 + 景気低迷」定義とは、物価の下落を伴った景気の低迷を指す場合」。持続的な物価下落」定義とは、「2年連続で物価が下落する場合」。

明治～戦前

図表13 物価と名目国民所得の推移

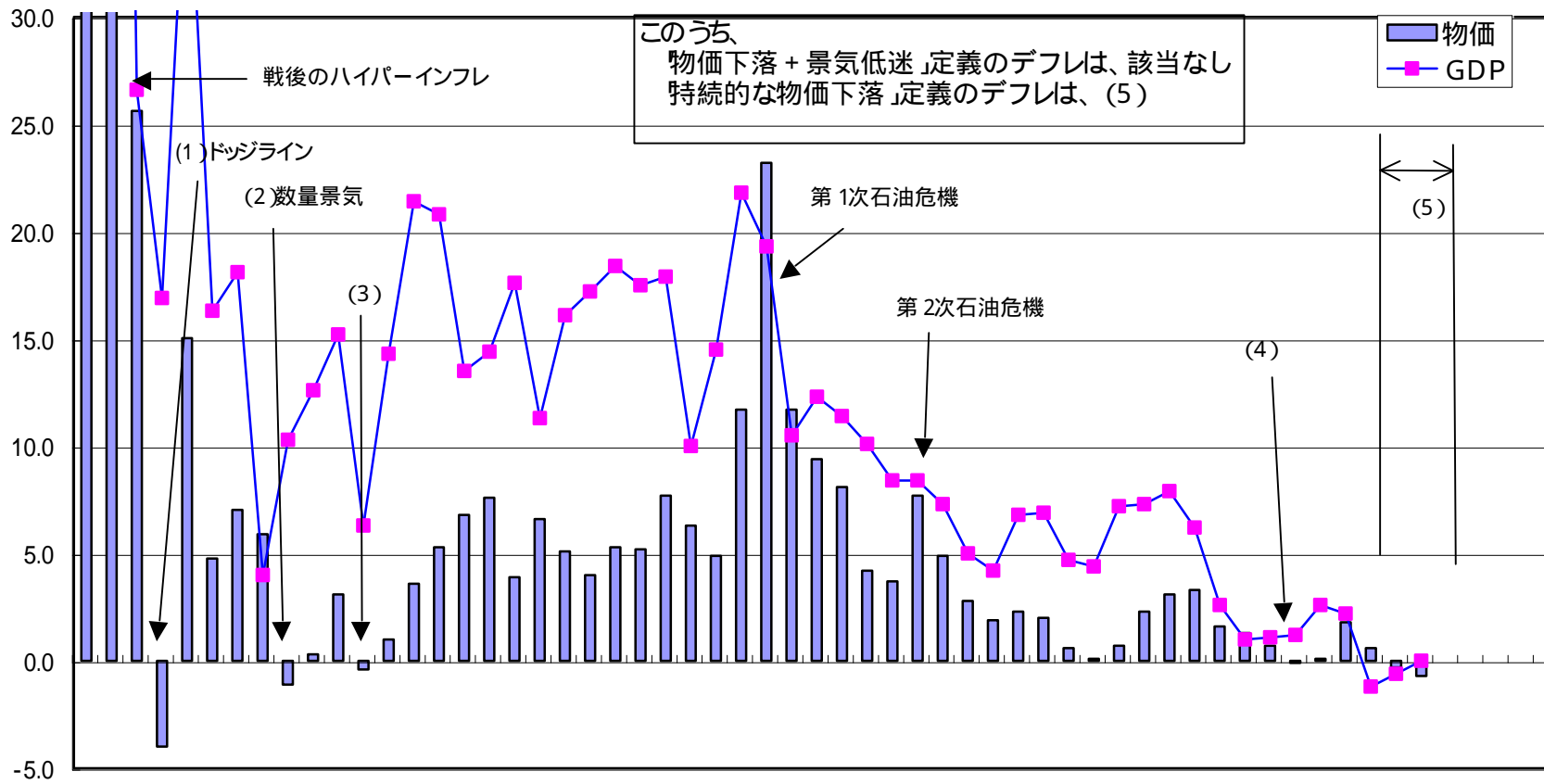


注1) 物価指数は、総合支出指数を採用。所得は、名目生産国民所得(大川推計)を採用。
 注2) 物価下落 + 景気低迷」定義とは、「物価の下落を伴った景気の低迷を指す場合」。
 持続的な物価下落」定義とは、「2年連続で物価が下落する場合」。

前年比%

戦後

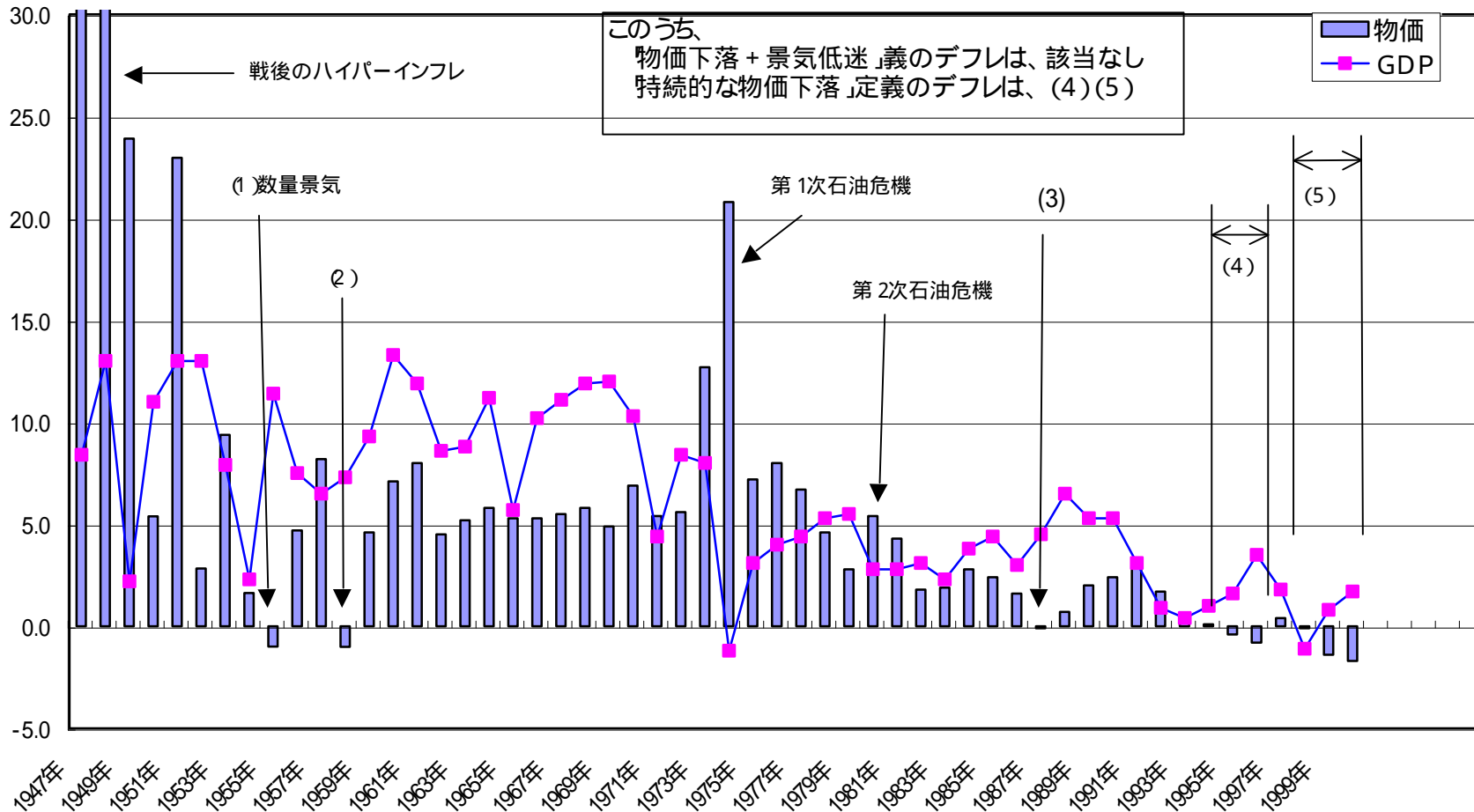
図表14 物価と名目GDPの推移



注1 物価指数は、戦後消費者物価指数総合(都市・農村総合)消費者物価指数を採用。GDPは、名目GNP(～1955年)と名目GDP(1956年～)を採用。
 注2 物価下落+景気低迷定義とは、物価の下落を伴った景気の低迷を指す場合。持続的な物価下落定義とは、「2年連続で物価が下落する場合」。

前年比% 戦後

図表15 物価 (GDPデフレーター) と実質 GDP の推移



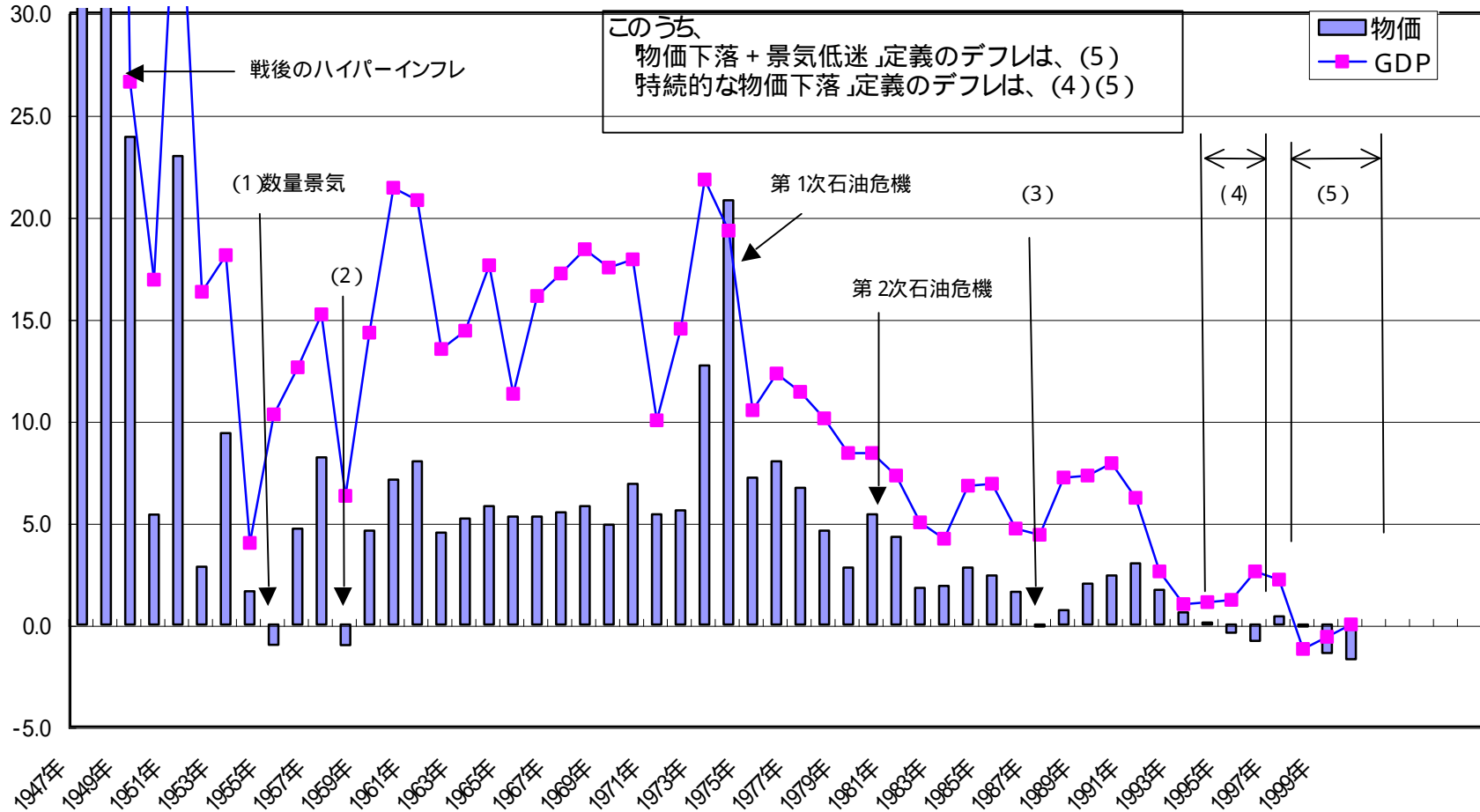
注1 物価指数は、GDPデフレーターを採用。GDPは、実質GNP (~1955年)と実質GDP (1956年~)を採用。

注2 物価下落 + 景気低迷」定義とは、物価の下落を伴った景気の低迷を指す場合」。特続的な物価下落」定義とは、「2年連続で物価が下落する場合」。

前年比%

戦後

図表16 物価 (GDPデフレーター) と名目 GDP の推移



注1 物価指数は、GDPデフレーターを採用。GDPは、名目GNP (~1955年)と名目GDP (1956年~)を採用。

注2 物価局定義とは、物価の下落を伴った景気の低迷を指す場合。M F定義とは、「2年連続で物価が下落する場合」。

図表17 新しい定義によるデフレの期間

1. CPを指標とした場合

	期 間	持続的な物価下落 CPI	物価下落 + 景気低迷	
			実質 GDP	名目 GDP
1	1882 ~ 86年 (明治15 ~ 17年)			1
2	1891 ~ 92年 (明治24 ~ 25年)			
3	1908 ~ 09年 (明治41 ~ 42年)			
4	1914 ~ 15年 (大正3 ~ 4年)			
5	1922 ~ 23年 (大正11 ~ 12年)			
6	1925 ~ 31年 (大正14 ~ 昭和6年)			2
7	1999 ~ 現在			

注) 1. 該当期間は、1882 ~ 84年 (明治15 ~ 17年) の3年間

2. 該当期間は、1926 ~ 27年 (昭和元 ~ 2年) の2年間と1929 ~ 1931年 (昭和4 ~ 6年) の3年間の2つに分かれる。

2. GDPデフレーターを指標とした場合

	期 間	持続的な物価下落 GDPデフレーター	物価下落 + 景気低迷	
			実質 GDP	名目 GDP
1	1995 ~ 96年 (平成7 ~ 8年)			
2	1998 ~ 2000年 (平成10 ~ 12年)			

注) 戦前は、デフレーターが存在しないため、戦後のみを対象に検討した。